951-V23ウ
1200500760472
51
23

海邊の墓

ゲアレリイ

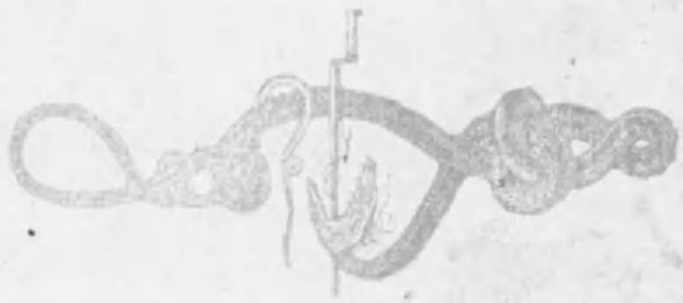
茨山修三訳

始

W22652
ヲ

イリレアヴ

墓の邊海



菱山修三譯

椎の木社

951
V23

海邊の墓

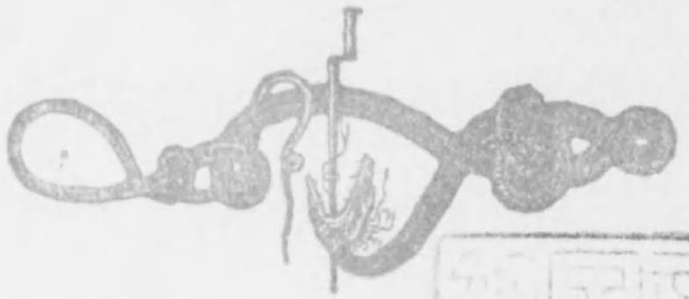
ポォル・ヴァレリィ

譯川修山菱

625-300

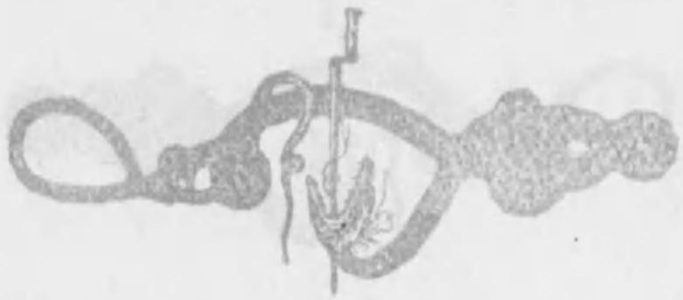
愛する魂よ、不滅の名なぞ獲ようとは努めるな、人の爲し得る業の深奥を究めよ

ピンダロス　ピチック第三



あまた鴉の歩むこのしづかな屋根瓦、――あの松の木のあひだあひだに、あの石碑のあひだあひだに、ひたひたと波打つて。――そのほとり、まさしく眞晝は炎で海を裏む、あはれ、恒に繰り返す海を！　神々のしづけさの上にまことに久しい諦視、それはひとすぢの思念の後の、なんといふ報償であらう！

かすかなひかりの彩なす、すぐれて正しい業は、眼に



みえない水沫の、金剛石をあまた使ひ果たす！　ともするとなんといふしづけさの擁かれることよ！　この深淵の上に、太陽の休むとき、ひとつの悠遠の根據をわかつ清らかな業――「時間」はこのとき煌めき、「夢」はそのまま知識の總和となる。

久遠の寶庫、ミネルヴァの質素な寺院、しじまの堆積、眼にみえてその虔しさ、――傲れる水よ、炎の面帕の下でゆたかなねむりをうちに擁く「眼」よ、――この私の沈默！　この魂のなかの建築、しかし、千の甍が波打つ黄金の棟、屋根よ！

「時間」の寺院、吐息するひとときがその模型を造る、この清らかなさかひに私は遊び、私は親しむ、身のまはり海のながめにとりまかれて。神々におくる私の最後の供へもの、――世にこの上もなき侮蔑を、冴えわたる燦としたひかりは底深い水の面に撒きちらす。

果實は甘美な味感に溶け込む、それはその形のやがて失はれる口のなかで、その喪失を無上の快味に替へる、そのやうに、私はいまこの身の果ての、茶毘の烟を吸ふ。

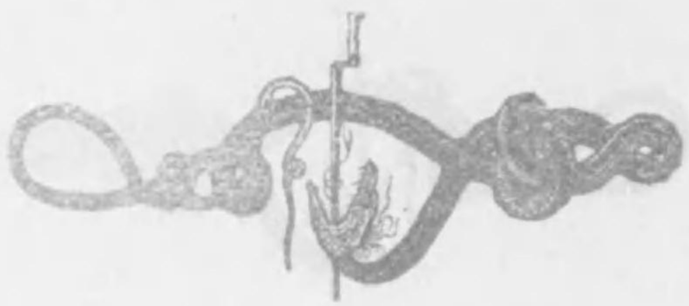
空はざはめく岸々の變化をはや燃え果てた魂に歌ひかける。

美しい空、まことの空よ、變りゆく私をみよ、まことに久しく自ら傲り、法外な無爲のなかに過した、が、いま力に滿ちて、私はこの耀かしい空間に身をまかす、このとき、亡き人々のいます家々の上を私の影はとほる、影はそのあえかな身振りに私を親します。

至點の炬火に魂を晒して、私はお前を蹈み停める、無慈悲な武器を備へるひかりの、げにみごとな正しさ！

私ははじめの位置に在りのままのお前を還す、――いまお前自らを省みよ！　……だが、およそひかりを與へるには暗い半面の影を要する。

あはれ、私ひとりのために、私ひとりに對して、私の裡に、――心情のかたはら、歌を生むみなもとに、この空隙とこころにのみ顯れるものとのさかひに、私の內部の大いさの、あの谺を私は待つ、苦く、うす暗く、ひゞきのとほる井戸に似て、この魂のなかに、それの、常にゆくりなきうつろな音のひゞくのを！



松の木のしげみのなかにことわりなくも囚はれた女人、あの墓地の柵の、かぼそい網目網目を噛む入海、また、私の閉ざされた眼の上、まばゆいばかりのかずかずの秘密、――お前は知るか、いかなる肉體がその穩かな終局にまで私を引き摺るのか、いかなる額がこのあまた骨を埋めた地にまで肉體を惹き寄せるのか。そこに、ひとすぢの火花は世に在らぬ人々を思念する。

閉ざされて、清らかに、物質なき炎に滿ちて、――ひかりに捧げられた大地のきれはし、この土地は私に氣に入る。日のひかりに支配されて、黄金と石とうす暗い木々とで造られて、――そこにたくさんの大理石(なのいし)が、たくさんの亡靈の上にわなないて。まことに忠實な海は墓碑を守つてそのほとりに眠る！

榮光を擔ふ犬よ、偶像に跪拜するものを却けよ！　ひとりの牧者の頬笑みをして、眞つ白な一群のしづかな墓、ふしぎな羊たちを、私が永いときをかけて養ふとき、賢い鳩も、むなしい夢も、好奇心に滿ちた天使も、これより遠ざけよ！

ひとたびここに來たならば、未來はもはや無爲である。

粗野な昆蟲は乾燥そのものを掻きみだし、――何か精嚴な原素となるまでに、一切は燃燒し、一切は解體し、空のなかに融合する……虛無に醉つてゐるならば、生は涯しなく大きい、苦患は心地よい、しかも智は明朗だ。

○

秘められて亡き人々はこの地のなかに安らかに、――この地は彼等を媛め、その神秘を乾かす。眞晝はあの高い處に、眞晝は動かず、その裡に自らを思念して、彼自らに陶醉する。……十全の頭腦、完璧の王冠、私はお前のなかの、眼にみえない變化だ。

お前が恐怖を抱くとすれば、たゞ私が存在するために過ぎぬ。私の後悔、私の疑惑、私の不自由、これはお前の立派な金剛石の環瑾だ。……しかし、その大理石のたいさう重い夜にあつては、木々の根もとの、定かならぬ亡き人々は既に徐々とお前に結合した。

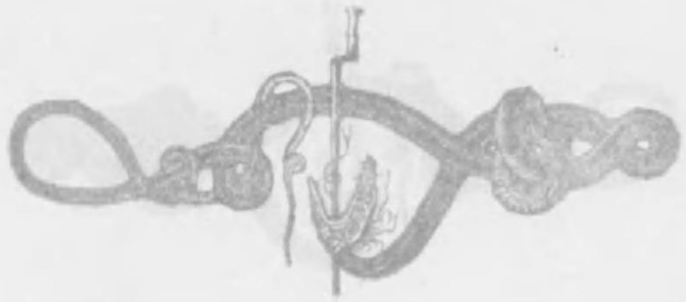
彼等は深い虛無のなかに溶け、赭い粘土は白い亡靈を吸ひとり、生の惠みは花々のなかに移つた！　亡き人々

の、親しい言葉、特異な技、比類のない魂は何處にあるのか。かつて涙の造られた處にいま幼蟲が這ひ摺つてゐるのに。

撲られた女の子のたてる癇高い笑ひ聲、その眼、その歯、濕つた瞼、情炎に燃えて戯れる婀娜な乳房、あたへる口脣に耀く血汐、世にこの上もない長所、それを覆ひ守る指、――すべては地の下に入つて、再びはかない賭けごとを始める！

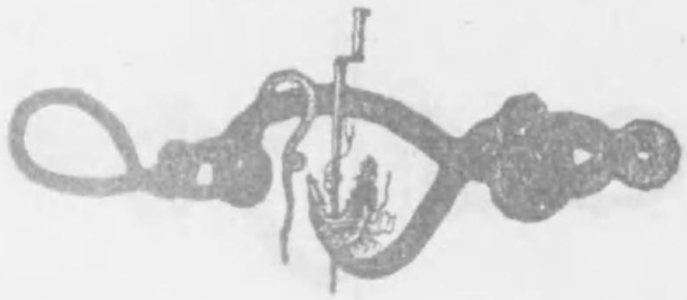
してみると、大いなる魂よ、肉眼に水と金とがみせてくれるこのやうにさまざまなかりそめの色のもはやない、ひとつの夢をお前は求めるであらうか。はや空に歸するとき、お前は歌を歌ふであらうか。あはれ、すべては逃げ去る！　私の存在はお粗末だ、けだかい忍耐も亦死ぬ！

鬱い、金色の、冷やかな不滅のもの、すさまじくも捷利の冠を頂く慰めの聖靈、――お前は造り出す、死のしづけさから、生みの母の胸と、美しいかりそめの夢と、虔しやかな詭計を！　しかし誰が知らぬものがあらう、



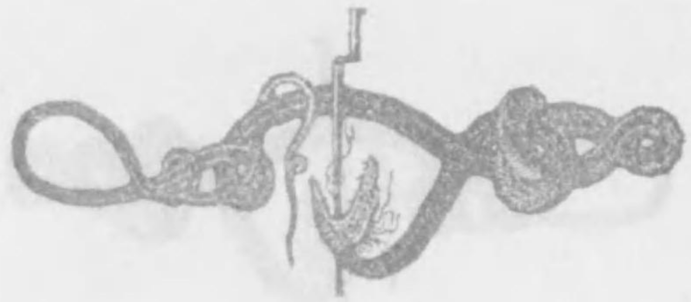
誰が拒むものがあらう、この空虛な頭蓋とこの久遠の笑とを！

すくひかけられたたくさんの重い墓土の下で、すでに大地の一部となつて、我等の蹈む足跡をまぎらはす――遠い祖先の人々よ、むなしい頭蓋骨よ、まことの苦患の種、征服しがたい蟲は、墓標の下に眠るお前等のために存在しない、それは生命を餌食として生き、私を離れぬ！



この私に對する、おそらくはいとほしさのためか、それとも憎しみか。それにいかなる名稱をあたへてもふさはしい程に、その秘めやかな齒牙は私に近寄る！　選ばず、彼はみ、彼は欲し、彼は夢み、また觸れる！　私の肉は彼の氣に入る。臥床の上まで、私はこの生きものの擒（とりこ）となつて生きる！

ゼノン！　殘酷なゼノン！　エレアのゼノンよ！　この翼ある征矢でお前は私を射拔いたのか。矢は震へて、翔び、翔ばずに停止する！　その音が私を生み、その矢が私を殺す！　あはれ！　太陽よ……この魂になんとい



ふ龜の影、素速く走りながら動くことも出來ないアシル！

否、否！……立て！ 引き續く世紀のなかに！ 私の肉體よ、打ち毀せ、この觀念形態を！ 私の胸よ、あらたに誕生するこのかぜを吸ひ込め！ まことに海の放つ微風は私に私の魂を返す……あはれ、鹽の匂ひに滿ちて溢れる力！ 生き生きと蘇へるためにあの波に走り寄れ！

しかり！ その性よりして激しやすい大海よ、豹の皮よ、また太陽の、千のまた千の影像に穴を穿たれた軍用のマントよ、しづけさに似た騷擾のなかで自らの煌めく尾を嚙んで、その青い肉に醉ふ、不死身の七つの頭ある蛇よ、

かぜが起る……いまこそ强く生きなければならぬ！ 大氣は私の書物を開き、それを閉ざす、續粉と散る波はいさましく岩々のあひだから迸る！ 翔べ、まぶしいばかりの本の頁！ 破れ、波よ！ 打ち破れ、躍る水で、すなどりの帆舟の行きかふこのしづかな甍を！

限定刊行　五百部
番ニ分類番号ヲ記シ別新番ノ人ノ本　壹百壹

昭和八年三月二十八日印刷
昭和八年三月三十一日發行

譯者　百田山菱
刊行者　刈谷源次郎
印刷者　刈谷源次郎
東京市中野區三島町四六

版行　椎の木社　三修宗治

951
V23

終